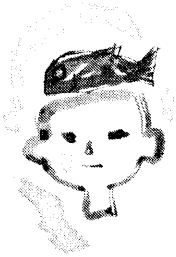
幼稚園にのぞむこと
――こどもに音楽の楽しさを――

古江綾子



ある日、ある時、幼稚園のこどもたちがたくさん集まっていた。それぞれ、はじめて出会ったこどもたちどうしであるが、そこはこどものことですぐに仲よしになり、じぶんの幼稚園の自慢話やら、かいじゅうの話に花が咲いていた。しかしだんだんとそれにもあきて、たいくつしはじめると、からかいごっこからけんかになり、はては取っ組み合いもでてくるにぎやかさになってしまった。

そのうち、一隅からふと歌声が聞えてきた。

〈コオシドヲ　ハイ!!
　クグリヌケ　ハイ!!
　ミアゲル　ユウヤケノソラニ　ハイ!!
　ダレガ　ウタウノカ　コモリウタ　ハイ!!
　ワタシノ　ジョウカマチ　ハイ!!　ハイ!!〉

ひとりのこどもが、となりのこどもの後頭部に手をおき、ハイ!!という時に前に押さえ前傾させる。押しておされるこどもは、じぶんからリズムにあわせて、ハイ!!といいながら、ちょうどおじぎをする格好になる。すばやくもとの姿勢にもどり、〈クグリヌケ ハイ〉とやるわけである。あたりは一瞬、しんとなった。

この動きのリーダーは、押しておすこどもではなくて、おじぎをするこどもである。じぶんの動きを強調したいあまりに、じぶんを押しておさせて、大きな運動にもっていっているわけ

である。回を重ねるごとに、ハイ!!のタイミングをとるために、歌っている間のからだは、まことによくリズムにのって運動をつづけるようになった。

そのへやは、二人の歌声と、あっけにとられてポカンと口をあけながらも、リズムにつられていっしょにからだを動かすこどもたちの姿でいっぱいになった。そのリズミカルさは、みているだけでもそれはそれは楽しそうで、何とも調子のよいものであった。

〈コオシドヲ…〉や、ハイ!! が、いいか悪いかなどということは、この際論外として、まったく規制のない状態におかれたこどもの中から生まれたリズム遊びとして、興味深く見ていた。

人は誰でも、リズムに反応するアンテナをもっている。それは、じぶんがキャッチできる範囲内でのリズムをさがし、その方に頭をふる。こどものアンテナは、特に自由自在に頭をふることができる。

〈コオシドヲ……〉をキャッチすることもあるし、次には、シンフォニーをキャッチすることもある。もし、まわりにキャッチする何もなければ、おそらくアンテナはさびついて、運動をやめ、音楽への可能性は、伸びずに終ってしまうかもしれない。

どうしたら、このアンテナをさびつかせずに、感度のよいアンテナに育てていくか、ということが、幼稚園、保育園、そして小学校低学年の教師に課せられた大事な仕事ではあるまいか。

何といっても、こどもにとって音楽は楽しいものでなければいけない。小学校は、勉強するところと期待して入学してくる一年生であるが、国語、社会、算数、理科、とわけられた教科でさえ、その学習指導の方法には、多分に遊び性をもたせているのである。まして音楽は、こどもにとって楽しい遊びでなければならない。

「楽しい」ということは、娯楽的な楽しさや、キャーキャーとはしゃぐ楽しさとはまったく別のもので、実に平凡ないい方であるが、「音楽の楽しさ」でなければ意味がない。

その楽しさが、幼児や低学年の児童のためにどのように用意されねばならないのであろうか。

こどもたちの音楽活動の中心になるのは、「歌う」ということである。「歌う」という活動を通して、リズム感、音程感、速度感……など、将来の音楽表現への基礎的な感覚を自分から身につけていくのである。しかし、この段階での「歌う」というこ

とは、発音や発声の能力をふまえて正しいリズムや音程で「歌う」という活動とは少しちがう立場をとっている。

リズミカルな歌には、歌っていて自然にからだが動いてくるようなものがあふれている。こどもは、身体活動を通して音楽と結びつき、それを楽しんでいく。そうしながら音楽へのアプローチの準備が重ねられていく。そういった段階で歌いながらからだを動かすことは、その動きを通し、からだ全体でリズムにのることを、からだでおぼえているわけである。このことは、もっとも基本になることであり、これがしっかりとからだでおぼえられていないと、学年が進んでどんなに楽譜がよめても、どんなに理論を知っていても、速度や、リズムのくずれにつながることにもなり、音楽のよろこびの心のない表現にも、つながっていく。

このように身体活動と結びついた音楽の場合〝このリズムはこどもにはむずかしい〟とか〝音程がとりにくい〟とか、いわばおとながあらかじめきめてしまったようなことは、その活動の楽しみを通して、こども自身がのりこえていけるものなのである。はじめてその歌に接したこどもでさえ、大ぜいのともだちがみんなでからだを動かしているなかにはいると、その口からは、正しくといおうか、じょうずにといおうか、ともかく音声としてはでてこないが、心もからだも、歌いながら他とともに活動をすることに浸りきってしまえるものなのである。

はじめての〈コオシドヲ　ハイ!!〉の場では、あの瞬間、二人以外のこどもたちは、あの歌を「知っている」「知らない」などはとび越してしまい、心の中で歌いながら、そのリズムをからだ中で吸収しようとする「楽しさ」があったにちがいないと思うのである。

私が、最近感じていることのひとつに、こども自身の歌のレパートリーが少なくなってきているのではないかということがある。

むかしは……といっても何年か前は、一年生に入学してくるこどもたちが、いい歌を（こどもらしいという面でも、教材という面でも）たくさん知っていて、幼稚園で歌ったのだという。私も一年生の教材としてそれらのいくつかをちょうだいしたようにおぼえている。そしてそれらの歌が、こどもなりにしっかり歌え、しかも歌うことを楽しんでいたようにも思われる。ところが最近は、そのような歌がきかれなくなったことと同時に、好きな歌というのをもっていないこどもが多いように思われる。自由に選曲させて歌わせると、園歌や、ごく最近経験した行事

の歌などが多く、そして次には、チューリップや、チョウチョ、むすんでひらいて、などが、歌われる。「チューリップ」や「チョウチョ」「むすんでひらいて」などは、幼稚園で歌ったというよりは、時期的に何となく耳にはいっていて知っている歌であろうから、ここでその不正確さをせめるつもりは毛頭ない。そして、園歌や行事のうたは、園全体で歌うことも多く、その練習の回数も多いことであろう。だからこどもにとっては好きな歌にはちがいない。

しかし、どうもそれらの歌を歌うこどもたちに「楽しさ」や「遊び」の心が感じられないことが、気になって仕方がない。こどものまわりに、いい歌をたくさんたくさん用意すべきではなかろうか。

私は、一年生や二年生でも、教科書以外の歌をたくさんとりあげていくようにしている。その中で、さきにのべたように、基礎的な感覚のつみ重ねがこども自身の中で蓄積されるような方向づけの指導を加えながら……。そして、それは、今までにのべてきたような立場からの「歌う」ということの教材でもあり、一般につかうことばとしての「歌う」教材でもある。

よく、授業参観や、研究会にいらしった先生方から「どんなところにその楽譜がありますか」との質問をうける。

「はい、楽譜やさんにあります」　……。まさか、楽譜がお菓子やさんで売っているはずがない。

私は、長い間、小学校低学年のためのテレビ学校放送「うたいましょう　ききましょう」という番組の先生としてもすごしてきた。これは、幼稚園や保育園でも時々は利用してくださっているようである。教室で利用するテレビは、教室では用意することのできない、いい材料をふんだんにつかう。その材料をいじくりまわし、こねくりまわして、いきのいい魚を台なしにしてしまうような料理のしかたさえしなければ、音楽のよさ、すばらしさをそのまま教室におくりこめるのである。私がいちばん気にしていたのは、何としても、楽しい遊び、の音楽でなければならぬということであった。もし、幼稚園や保育園で、よろこんで利用していただいたとしたら、その点での共鳴がいただけたのではないかと思っている。

私は、逆にもう少し自由な立場で（少なくとも小学校音楽科としてよりは）おくられてくる幼稚園の番組、古くは「ドレミファ船長」から、そして今は「仲よしリズム」を時々利用させてもらっている。これには、自分では動けない動きでありながら、それに浸りきれるリズムの楽しさがあり、こどもには、一度は是非通ってもらいたい音楽の道すじであると思っているか

ら……。そして、それらから　ひろった　題材のいくつかは、毎年四月、五月の一年生の教材として今でも生きている。

どういうわけか、私は、入学前、幼稚園にいかせてもらえなかった。まったく突然に、といった感じで、ほとんどが幼稚園をすませてきた大ぜいのともだちと一年生の教室で出会った。入学した最初の日、その教室の机と机の間で、先生のオルガンにあわせて〈からす　なぜ　なくの……〉と歌いながらゆうぎをしている友だちをみた時のおどろきが、昨日のように思い出される。

今のこどもたちは、ゆうぎはおろか、立派な器楽演奏もできるといって入学してくる。

特に、動きに関しては、こどもらしい創造の芽を引きだされ、伸びやすい状態で、私どもにおくられてくることに、いつも感謝をしている。

音楽という窓からこどもをみた時、立派にできるということと、楽しく遊びながらできるということが、どうぞ両立していそであろうことを願ってやまない。

（お茶の水女子大学附属小学校）

幼稚園・保育所と小学校のつながりについて、いろいろと見直されてきている昨今、小学校の先生方にお願いして「幼稚園にのぞむ」という題で書いていただいたら……と編集会議で話し合いました。すでに三月号の「所沢市教育相談室」の牧田先生、四月号の「ことばの教室」の清原先生にこの方向で書いていただきましたが、とくに「小学校の先生」とかぎらずに、今後も、幼稚園・保育所とつながりの深い方々にお願いする方針です。

今月は、お茶の水女子大学附属小学校、音楽担任の古江先生にご執筆いただきました。

（編集部）